

国際交流で知る地域づくりの視点

～オーストラリア・クイーンズランド州ヌーサでのホームステイ・自然活動を通して～

○坂口正治（東洋大学短期大学）

矢川律子（Cultural Exchange Holidaysオーストラリア理事）

石井 允（立教大学）

鈴木秀雄（関東学院大学）

キーワード：国際（異文化）交流、地域づくり、ゆとり、ホームステイ、自然活動、オーストラリア・ヌーサ

I. はじめに

オーストラリアの文化交流の新しいリゾートポイント、ヌーサは、実践報告の中でも述べている通り、ブリスベン（クイーンズランドの州都）から北へ約130 キロメートルに位置する。サンシャインコーストの中で最も洗練された美しい町である。年間を通して気候は温暖で、海と川、森と山に囲まれ、オーストラリアの人びとにも自然豊かなリゾート地として将来多くの可能性が期待されている。

このヌーサを、国際交流、地域づくり、町おこしという視点から調査研究し、われわれが住む町、いわゆる足元の文化・環境をどう見直し地域づくりに結びつけるかについて、Field Research and Studyを中心に考察をすすめた。このField Research and Studyは現地を共同研究者が計7回（その期間と担当者については、研究の方法と期間の表1を参照）にわたり現地ヌーサを訪れ、ホームステイ・自然活動（リバークルーズ、ファームキャンピング、ホースバックライディング、ジョイフライト、ハーレーダビッドソンライド、スキューバーダイビング）等の諸活動を通して国際交流による諸活動から地域づくりの視点を明確にし、そこで得られた資料、体験、活動から次にどうわれわれの住む町に生かしていくかという視点で多角的な現地との交流（調査・研究）を展開した。

ヌーサは、市内いたるところに緑と澄んだ水・空気があふれ、まさに自然と融合した公園都市の様相を呈している。外国を含め外から訪れた人達がこのようなゆったりしたライフスタイルのヌーサに触れ、大自然の中でのさまざまな行動を体験すると、地域づくりや町おこしのポイントは、決してそこに存在する自然の質や量に単純に依存するのではなくむしろ限られた自然や町の文化をしっかりと把握し、文化・環境をいかに正しく評価するかにあるということを実感することができる。

そのためには、真の“ゆとり”（時間、金銭、空間、体力、気力などの余裕を持つこと）について、再考すべきであろう。意識できなかったものを積極的に認識させ、また意識することができる機会を提供してくれるのが、異文化交流での体験である。¹⁾

II. 研究の目的

本研究は、オーストラリアでの多世代（小学生、中学生、高校生、大学生、成人、家庭婦人、高齢者、障害児（者））などによるホームステイおよび自然活動を通して、国際交流の中から地域づくりをどうすべきかという視点（構成要素）を明確にすることを目的とする。

Ⅲ. 研究の方法と期間

本研究は、現地（オーストラリア・クイーンズランド州ヌーサ）を共同研究者が下記表1の期間と日程によりそれぞれの役割をもって複次視察した。それぞれの視察については、調査、研究の重点をしばらくField Research and Study という課題をもうけ、Research Director、Research Assistantの役割を明確にし、役割分担の中で、地域づくりの部品にあたる構成要素の明確化をはかった。調査・研究の期間と役割分担は次の通りである：

表1. Field Research and Study の期間と担当者

担当者 調査活動領域	矢川	石井	鈴木	坂口
期間	異文化交流	人間交流 (ホームステイ)	自然活動	福祉活動
1991年(H3)	◎ 8/11 ~ 25			
1993年(H5)	△ 11/ 8 ~ 25	◎ 11/8 ~ 17		
1993年(H5)	◎ 12/23 ~ 1/10			
1994年(H6)	△ 3/23 ~ 3/31			◎ 3/23 ~ 3/31
1994年(H6)	△ 8/ 7 ~ 9/ 6			◎ 8/12 ~ 8/20
1994年(H6)	△ 10/27 ~ 11/ 2	◎ 10/27 ~ 11/8		
1995年(H7)	△ 3/20 ~ 4/ 1		◎ 3/14 ~ 3/26	

◎ : Research Director (調査責任者)

△ : Research Assistant (調査担当者)

本研究の第1回目の調査・研究は、1991年(平成3年)8月11日から8月25日迄、主任責任者をつとめた矢川律子が担当し、交際交流で知る地域づくりの視点から現地法人との交渉にはじまり、ホームステイ、自然活動、福祉活動施設の開拓をすすめ、順次第2回目の石井允による人間交流(ホームステイ)を中心とする調査・研究、坂口正治による福祉活動調査、そして1995年(平成7年)3月に実施された鈴木秀雄のレジャー・レクリエーション活動調査・研究の計7回にわたるものとなった。

Ⅳ. 考察

役割分担した共同研究内容(異文化交流の視点,矢川;人間交流(ホームステイ)の視点,石井;社会福祉施設の視点,坂口;レジャー・レクリエーションからみた自然活動の視点,鈴木)からそれぞれの地域づくりの構成要素をその機能上から述べることにする。

1. 異文化交流の視点から：

まずオーストラリアの国民性は、フレンドリーで日本人に対して好意的である。オーストラリアは多国籍におよぶ人びとが集まっている。またそこには多くの異なった考えを有する人達が、お互いを尊重し合い仲間意識を持ち、その異なりから相手に自身の意思を表現する方法としての言葉の自己主張があり、日本文化とは異なり発言せずとも相手が理解してくれるという表現行動形式の異なりなどが理解できた。また、ヌーサの町の文化・環境的価値も、素朴さを失わないための規則づくりや、文化・環境的価値を高めていくための不断の努力によって形成されたものである。河口からヌーサリバーをカヌーやヨットでさかのぼるとき、汚れがまったくなく、川がきれいであることに驚き、自然を汚さないいじらないという考えのもとに、そこに住む人が自然とどう向き合っていくべきかという

共通認識ができあがっているからこそその結果であり、地域づくりの見事さを実感した。

2. 人間交流（ホームステイ）の視点から：

ヌーサでの人間交流いわゆるホームステイの体験によりオーストラリアにおける慣習日常行動様式を理解することができた。また、ホームステイの体験により、自身をみつめ直す機会となり、日本での地域生活に対する反省点をより明確にするという利点を得られた。オーストラリア（ヌーサ）でのField Studyは、オーストラリアを第2の“ふるさと”のように感じさせた。オーストラリア人のおおらかさ、人なつこさ、フレンドリーな国民性を理解し、自身の地域生活形態の中にいかに“ゆとり”として導入するかを知るよい機会となり、このような人間交流こそがまず地域づくりには大切であり、そこに存在する地域づくりのための賦活財（自然や地域の特徴）だけが事のはじめとなるのではなく人の交流こそがポイントであることを痛感するのである。

3. レジャー・レクリエーション²⁾としての自然活動

自然活動がレジャー・レクリエーションとして実行される時、その自然活動は決して手段として用いられるのではなく、楽しむことを主たる目的として心からの喜びに通じる活動なのである。

自然活動とは、いかに人工的でない環境で、人間らしい活動をどうするかであり、それは素朴さにはじまり複雑な冒険的、探検的な活動にまでおよぶ。楽しむことを目的としながら、自然からの影響により人間を変えていくという役割を持っている。

自然の豊かさ、素朴さ、そして自然そのものの“自然さ”を持ちあわせているヌーサにおけるレジャー・レクリエーションとしての自然活動は、われわれが試みようとする地域づくりに関する自然活動に大きな指針を与えてくれるものである。

4. 社会福祉の視点から：

ヌーサでの社会福祉と地域づくりでは、市民が自身（個人）にできるボランティア活動を生活の中に個人レベルでしっかりと位置づけていることである。たとえば、近隣の高齢者を訪ねて話し相手になったり、散歩を一緒に楽しんだりと実に幅の広い活動を実践している。この活動がまた自分流（ヌーサ流）のボランティア活動なのである。デイケアセンターにおいては、30名にもおよぶ高齢者の介助をしているのはわずか3名の専任職員とドライバーであり、あとはボランティア5～6名が素晴らしい活動をしていた。昼食を前に準備する人、掃除をする人、高齢者と一緒にゲームに興じる人とさまざまな活動の姿を目にする機会を得た。この福祉施設では、地域の人びとが手づくりの小物（人形、手芸品、ペーパークラフト等）いろいろな品物が販売されるようになっていて、この収益をデイケアセンターの活動資金の一部として活用しているのである。地域の人びとにささえられ運営されているこのデイケアセンターこそが地域に根ざした施設であると共に、地域づくりの根源であるように思えるといっても過言ではない。表面的に“ある活動をしました”というボランティア活動に対する評価を求める請求書型の活動ではなく、むしろ自身が地域への感謝の気持ちから“このような活動ができた”という心を表わす領収書型の活動という理解をすることができる。

V. まとめ

国際交流を通して、それぞれの町が考えなければならないことは、単なる真似事ではなく、その地域ならではの持ち味を出すことである。その視点では外国のものを排する“排外”である。また、国際交流からヒントを得て地域や町らしさをかもし出すには、素直に学ぶ姿勢が必要となる。その意味で“排外”といえよう。

地域づくりや町おこしを視点においた国際交流は「～のたぐい（類）」や「～もどき」といわれる疑似体験を多くするのではなく、「（本物、本質）らしさ」や「（本物、本質）ならではの」の活動として実感できる心豊かな感動を呼び起こすものでなければならない。

もし地域や町に感動おこしの要素が何もないと感じるなら、むしろその“無の素朴さ”を活用すべきである。その地域ならではの持ち味を出すことができるはずだし、地域や町らしさを加える工夫をしていけばよいことになる。

極端な「排外」と「排外」を避け、相互信頼と尊重し合う姿勢で交流していくことが重要である。そこに、自らが気づかずにいる潜在価値を顕在化させるための数多くのヒントがある。

オランダの文化人類学者で「ホモ・ルーデンス」の著者であるヨハン・ホイジンガが「初め文化は遊ばれた」といっているように、自ら住む町の文化・環境的価値の再認識・再発見による地域づくりは、良い意味での遊びを通して“根気”よく活動しつづけることにより、次第に“本気”になっていくことによって実現できる。その本気が住む町の文化・環境的価値を生み出していくはずである。

ヌーサの町の文化・環境的価値も、素朴さを失わないための規則づくりや、文化・環境的価値を高めていくための不断の努力によって形成されたものである。

たとえば建物も人工都市化を避けるための規制をし、景観保持のため樹木より高くしないという確固たる地域づくりの信念や考え方からも人びとの心の中に“ゆとり”という認識がいかに深く位置づけられているかを知ることができる。これがヌーサ流の文化づくりであり、町おこしである。

文化・環境的価値の再認識・再発見からの地域づくりと町おこしは、住むものの心根をどう「意識化」させていくべきかに尽きる。基盤になるコンセプトを明確にし、多くの意見をいかに吸い上げていけるかということが最大のポイントとなる。意識化の後から、やがて地域づくりや町おこし行動という実践がついていくことになる。

「一村一品」という物質創造型から、「一村一考」への思想創造型へ転換し³⁾、かけがえのない地域づくりや町おこしをユニークに、そしてソフトにしていくべきといえる。

[引用文献]

- 1), 3) 矢川律子、鈴木秀雄、「国際交流で知る地域づくり・町おこし～足元の文化・環境の見直しから～『日経Uターン』1995年 Vol.7、夏号、P.122～123.
- 2) 鈴木秀雄、「余暇活動を通してUターンのチャンスを考える～“地域特性の創造”と“まち起こし”の視点から若者の活動や体験をどうとらえるか～」『日経Uターン』1995、Vol.5、1月号、P.96～97.